

# TAKARAMONO

## News

Vol.5  
2009.05



特集：ふくしまでがんばるひと②

刀匠 藤安 将平さん



## そして立子山へ

そんな師匠の元を離れたきつかけは過労。いい意味で師匠を裏切ったり喜ぶ顔を見るのがたまらなく嬉しくて、十日かかっていた作業を、八日、七日、三日、最終的には二日半に縮めたってんだからたまげるといふもの。倒れて四十時間ほど目が見えなくなったのを機に、なんやかやで福島県立子山に仕事場を持ち、現在に至るといふわけでありまして、日々、作刀に打ち込んでいたのであります。

えー、少しでも藤安刀匠の人となりをかっけていただきたいがゆえに長々と述べさせていたいただきましたが、これにて拙い口上はおしまいとさせていただきます。引き続き通常の文体にてお楽しみください。

## 本物の美しさとは

鍛錬作業の見学後、刀を見せていただく。手にした瞬間、ヒヤリとした緊張のモールスが体じゅうを駆け抜けた。生まれて初めて触れた刀にスリリとした手応えを感じつつ、刀身を光にかざす。う、美しい、でもちよつと怖い、だ

けどやつぱり美しい。

きつとこれは、刀に對する『畏怖』に引き立てられた『美しさ』なのだろう。そんなふつに思いついて、息を殺して刃紋を眺めていた。

「切るだけなら美しさは必要ない」。続けて刀匠は言う。「武器をここまで美しく仕上げた日本人とはどんな民族なのか?」。現在、日本刀は美術品という位置づけにあるが、ただ美しいだけの刀は本当の刀ではない。絶対に折れない、欠けないといった耐久力、つまり「道具としての完璧な裏付けがなければ本当の美しさにはたどり着けない」。ドキッとした。見た目ばかりを取り繕う怠惰な精神を見破られたようで、なんだか急に恥ずかしくなったのだ。刀匠の言葉が強く、そして痛く、心に響く。

## なぜこんなことをするのか

美術品としての作刀という楽な道はある。あるが、敢えてそうではない道を歩いてきた。「ホント私には、なん

にもない、だから逆に何やったって平気なんです。セオリーから外れた作り方をしても構わない。たとえそれが間違っていたとしても、その結果を自分で知り、蓄積する。その繰り返し繰り返して古刀再現の糸口をつかむことができた。きつと、この道でなければつかめなかつただろう。「なんのためにこんなことをするのか」。自問自答することもあるが、とにかくいま自分がやっておかなきゃならないことなのだ、そう言い聞かせている。

## とにかく刀に 触ってほしいんです

数万円程度のお金で人命を奪う事件が相次いでいる。その昔、それこそ何百万本という刀がありふれていた。にも関わらず無差別に人を殺めるような事件が起きなかつたのは、自らに對する刃(やいば)として精神にブレーキをかける日本刀の存在があつたから。刀が目の前に置かれた瞬間、取材陣全員が背筋が条件反射でピン!と伸びたのもきつと、そういう力を受け取つたからに違いない。

「刀は離れて見るものじゃない。手に取らなきゃ始まらないんです。なんでもいいからとにかく刀に触ってほしい」。話しの途中で何が言いたかつたのか分からなくなってしまうほどに熱く、熱く語る刀匠の瞳の輝きは、あの日のあの夏、あの本を手にした時からずっと変わっていない。そんな気がして、胸が熱くなつた。



▲再現された古刀の地鉄(じがね)

## 藤安将平鍛刀場

福島県福島市立子山字溜井下二一  
電話 〇二四一五九七二七四八  
E-mail: [tatuko-3@gray.plala.or.jp](mailto:tatuko-3@gray.plala.or.jp)  
<http://www.yokosha.co.jp/~fujiyasu/>

タカラモノニュースは、お客様の「楽しい、ウレシイ」に役立つ情報提供を目指して、年4回発行しております。ご意見ご要望など、なんでもお気軽にお寄せください。



発想から発送までお客様のニーズにお応えします。

# タカラ印刷株式会社

〒960-8141 福島県福島市渡利字絵馬平86-9

TEL.024-526-4303 FAX.024-526-4302

E-mail [takara@inaka.co.jp](mailto:takara@inaka.co.jp) <http://www.takara.inaka.co.jp/>



適用範囲:印刷・製本・社会調査